

おい図書館

No.185

発行
代表
おおい図書館
青木 和子
松本市牧の原1-104-416
TEL 047-311-0886

講演会

図書館が松戸を変える！

4月16日(土)、第23回総会後に講演会を開催。講師は伊東直登さん

(長野県塩尻市立図書館前館長、松本大学教授)。行政や議員の方の参加もあり、会場は満席。熱気あふれる会となりました。皆様からの感想を掲載致します。



小林真理

塩尻図書館は、市民交流センター「えんばーく」という地下1階地上5階建ての複合施設の1・2階にある。この図書館のコンセプトはズバリ「役立つ図書館」。そ

れを実現するために次の3つを心がけて、必要な場や空間を作っているという。その具体的な「仕かけ」をお話し頂いた。

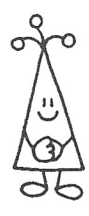
①人と情報(資料・本)をつなぐ。例えば、芥川龍之介の文学作品の隣に芥川に関するエッセイや研究書を置く。「落語」のコーナーには文庫・新書・単行本・DVD・全集・辞典などをまとめて置く。こうすることで、あちこち探し回る必要がなくなり、関連資料も目につき易くなる。

②人と人をつなぐ。ピアノとサクソフスによるジャズ演奏の中、本の朗読に合わせ大きな筆を持った高校生が走り回って字を書くといい参加型の習字を行っ

た。演奏者、朗読者、高校生のコラボ。それを楽しそうにながめる来館者。こうしたイベントを定期的に開催している。

③図書館機能と他の機能をつなぐ。子育て支援センターを出た所に児童書コーナーを配置。3階の市民サロン(フリースペース)は飲食可能でおしゃべりもOK。図書館で借りた本での学習もできるため、高校生で賑わっている。

これらはどれも「えんばーく」のような立派な施設がなければ実現しないように思えるが、「工夫(心持ち)次第です」と伊東さんは仰った。伺った貴重なお話を、松戸の図書館の未来にぜひ繋げたい。感謝を込めて！



西山怜子

昨年12月に「おい図書館」メンバー5名が塩尻市立図書館を見学し、その見学記は今報182号に掲載

載されています。私のように見学できなかった人のために伊東さんの講演会が企画されました。素晴らしい「えんぱーく」・図書館を持つ市民は幸せだろうと、本当に羨ましく思います。

「えんぱーく」をつくるにあたり、大変な困難もあったと思います。図書館に対する理解のない政治家や市民もいたでしょうが、造るにあたり、図書館や他施設の役割について研究し、考え、建物の構造もそれを反映しているのでしょう。この実現を決断し、実行する力と、さらに支える人の情熱が必要です。

経済面での心配もあったと思います。それらを払拭して実現できた賜が現在の「えんぱーく」なのではないでしょうか。是非見学したいです。屋上からの山並みも見たいです。

講演会は満席でした。松戸市立図書館の現状は厳しいものです。

他の都市と比べて、建物自体も諸

諸のデータ的にも劣っています。昨年6月には元鳥取県知事の片山善博氏を招き、シンポジウムが開かれました。松戸市図書館整備計画審議会も行われました。今回の講演会には、松戸市の伊藤教育長、議員数名、審議会委員長の常世田さんも参加されました。いかに図書館が松戸市にとって重大な課題であるかが明らかです。

松戸市に理想的な図書館を現実化するには困難も多いと思いますが、希望を捨てたくありません。審議会で時間をかけ英知を集めた成果を無駄にしたいくありません。塩尻市の「えんぱーく」のような、図書館を含めた素晴らしい施設の実現を目標に頑張りますように。



島田みゆき

伊東さんの講演会を、大変興

味深く拝聴しました。

施設は市民交流センターとして複合施設になっており、中でも子育て支援センターとの併設は、次世代を担う子供たちにとってかけがえのないものであり、良書との出会いのきっかけになれば素晴らしいと感じました。学童期の子供たちの居場所という点においても、とても良い取り組みだと思います。ハード面だけでなく、今回一番すごいと思われたのは、伊東さんを始めとする職員の方々の想いです。どんなに素敵な建て物を建てても、地域に役立つ図書館作りをしたい、人と資料情報をつなげて行きたいという職員の方々の想いがなければ、これだけのイベントや混配、別置などの仕掛け、工夫、地域交流は出来なかったのではないのでしょうか。

今後、松戸市で新しい図書館を建てる前にきちんとしたビジョン

を持ち、実行力のある職員を育成して行く事が大切なのではないかと感じました。

「役立つ図書館」を考える



古関とし子

第23回総会に続いて行われた伊東直登さんの講演会「地域・人・情報をつなぐ」塩尻市立図書館の試み」に出席しました。

伊東さんは「町の活性化を兼ねた新しい図書館をつくる」ため、たくさんの人を巻き込んで新しい塩尻市立図書館を地域に生み出した方です。役立つ図書館（課題解決型図書館）を考えて、図書館が地域になくてはならないものとなる取り組みを具体的に示して下さいました。

学校（学校図書館）と地域（市立図書館）をつなぐために市立図書館で研修し基本を培ってから学

校図書館に行く。臨時職員でも全員が司書資格を持っています。

地元の書店に配慮した取り組みでは、複本数を減らし、書店から購入。作家の講演会には販売の機会を設け、図書館のおすすめの絵本リストに書店案内を入れるなどです。

ナウマン象を3Dプリンターで地元企業に実物大で作って貰い、図書館の入口に置いて（足元に企業名の名札）人気となり、その企業は新たに受注したそうです。

「役立つ図書館」を考えたの取り組みも豊富です。配架の仕掛けでは、混合配置（単行本・新書・文庫・CD・DVD・参考図書・雑誌・小説・エッセイ・文学・研究等）、別置（仕事・闘病記・旅・育児・ワイン等）、また、企画展、話題のテーマやイベントの時には必ず本とつなぐ仕掛けを作っています。他の組織や

イベントとの連携や人と人をつなぐ「場」を設けることによって、地域が活き活きしている様子が伝わってきました。

最後に、「図書館は継続して行くことが大切」と言われた言葉が心に残りました。



神凪子

塩尻の図書館と「えんぱーく」の素晴らしさを詠んだり聞いたりしていたので、伊東直登さんの講演に大きな期待をしていました。特に、素晴らしい図書館ができるにあたって住民参加で時間をかけて話し合ったということに、強く興味を引かれていました。

当日、伊東さんは聴衆の多くが「えんぱーく」を知っているという前提でお話しされていたので、ちょっと不消化でした。「地域・人・情報をつなぐ」というタイトルとよつつの視点：①機能をつなぐ

「えんぱーく」 ②機能をつなぐ
 (複合施設に) ことで生まれる新しい図書館サービス ③圧倒的な住民の皆さんとつながっていない図書館サービスを变える…は、一応わかったような気がしました。例えば配架では、利用し易いように資料を並べていることなどは、「そうそう！そうしてくれ」とありかたいのよね」などと断片的に納得しながら聞いていました。地元企業や、市民活動の案内チラシを積極的に置いてるのは驚きです。オープンスペースやガラス張りの会議室など、利用者が互いにその存在を認め合うというやり方に私たちはなじめるかな？という不安もちょっぴり。松戸では市民活動の案内チラシを置くことさえままならない現状がありますから、明るくて気軽に足が向く「えんぱーく」を羨ましく思う反面、松戸の場合、人口比からみても同規

模のものだったらくし、館必要だということに気が遠くなります。

伊東さんは、松戸なりのやり方で良いのではないかという趣旨のお話をしていました。それにしては、市民参加のまちづくり・図書館づくりをしたいと思います。塩尻の「住民参加の図書館づくり」については、市長選挙との関係があったようで、意外でした。市長が住民参加という方法に見識を挿っていたこと、職員についても経歴に捉われずにやる気のある者を抜擢したこと。もう少しじっくりとお話を聞きたいと思いました。



大石民子

4月16日、総会後の講演会に出席した。講師は塩尻市立図書館前館長の伊東直登さん。母体となる市民交流センターとの関係や図書館の取り組み等、映像で

館内を案内しながら説明してくださった。

塩尻が目指すものは、住民にとって役に立つ図書館!!
 役に立つ図書館とは、情報学的に届けてつなげることで、情報と新たな出会いや発見を創出すること。それは、専門家につないで、近くの高専学校と連携したり、音楽家を招いてのコンサートやビジネス支援等々、図書館がその地になくてはならないものになる取り組みをし、それによって利用者が増える。結果として、今まで図書館に来なかった人を引きつける。これは館長一人の力ではなく、職員全員がフレキシブルな情報提供力をつけ、サービス担当や資料担当になり、今までにないサービスを提供する。そういう努力が住民に認められて、6万6千余人のまでに、5年間で累計300万人もの来館者を迎えたとのこと。ま

ちが図書館中心に活動している、
と言っても過言ではないくらいだ。

松戸市の図書館は、19の市民センターの中に分館を有しており、住民が徒歩や自転車でも気軽に利用できる便利さがある。そのおかげか、会報182号に掲載されている「県内公立図書館サービス指標」では、個人貸出登録率が県内4位である。それだけ住民の図書館に対する期待は強いのだろう。それなのに、個人貸出冊数・予算に占める図書費・年間受入冊数等は平均以下。人口一人あたりの蔵書冊数は県内最下位である。これで見えて来るのは、住民の要望と図書館行政が大きく掛け離れているという事だ。

しかし、この2年間、「松戸市図書館整備計画審議会」が催され、良い計画・提案が出されて、現実の形に出来るよう、前向きに取り組むとの姿勢が示されたと思うので、大いに期待している。



坂本由喜子

待望の伊東直登さんの講演会が開催された。図書館が出来るまでに、塩尻市は2回の市長選で図書館建設（まちづくり）の是非が争点の一つとなり、市民の間に対立が出来るほど図書館建設に関心が高まって、その上で建設賛成派の市長が当選し、伊東さんは敢えて手を挙げて図書館づくりに参加された由。図書館の必要性とか、図書館とは何か？など、根源的などころまで教年にならって市民参加で議論されたと思うと、塩尻市立図書館が一層いとおしく思われてならない。

図書館の中身は、すでに会報182号で塩崎さんと島さんが詳しく報告しておられる通りである。頂いた資料によれば、塩尻市民交流センターの中に位置し、これが街の中心地に来たこと

で人の流れは変わり、その役割は旧来型の図書館とはその機能が大きく異なっている。

図書館といえは、まだまた本を保管し市民に貸し出す所として認識される事が多いが、塩尻の場合、市民の意欲と活動を支援することをモットーにして図書館サービスを行い、更にセンターの中に組み込まれた行政の子育て支援シニア活動支援、音楽練習室、ビジネス支援（就職活動支援も）などの行政サービスを結びつけるなど、複合施設として市民に新しい図書館サービスを提供する場所になっている。写真によれば、フリースペースがあって共同作業や集会用が催されたり、パソコン利用も用意されている。

図書館が市民の求めに応じて市民活動を支援（情報提供）するうちに、市民にとっては、なくてはならない所になり、市民の集まる場

所になっていくのが想像できる。当然、図書館利用者は増え、またらされる情報も多くなり、市民の経済活動にもプラス効果が予想される。

最後にもうひとつ「図書館は信州におじり 本の寺小屋」という講座(講演会)を開講しており、出版社・著者・地元書店と連携する事業にも力を注いでいる。出版文化も大切であり、活字離れの昨今にあつて、読書は何物にも代えがたい愉しみとする市民にとつては、嬉しい機会を提供している。その趣旨の最後は、「集う人々の知恵の交流を促すことで、地方発の文化の創造と情報発信に挑戦したい」と結んでいる。



市議会議員 末松裕人 「とても良い話が聞ける」とお誘いを受けて、講演会に参加しました。というのも、先日の視察で、かねてより話題になっていた佐賀県武雄市立図書館を訪問し、それまではやや斜に構えて促えていた図書館でしたが、行ってみると利用者目線ではそれなりに魅力的で、ほだされて帰って来てしまったので、ここでもう一度、図書館とは何か? という原点を確認しておこうと考えたからです。

講演をお聞きして、私の理解と印象に残ったのは、「つなぐ、つながる」をキーワードに、図書館という公共財により積極的に地域づくり・まちづくりを行つていこうとする攻めの図書館像でした。そのコンセプトは、ハード面の施設づくりにも反映されているようです。とりわけ「図書館とサイレントのあり方」という話に関心を強く持ちました。私自身、子どもと図書館(児童図書館という意味ではありません)についてとても関心があり、百聞は一見に如かずというので、機会があれば訪問してみようと思いました。仕事の機会を通して、図書館に限らず様々な優れた事例の視察を重ねてきましたが、その要諦は、施設や仕組みではなく、「信念や情熱を持って取り組む人」にあるというのが、私の学びです。今回もそのことを再確認した講演会でした。



本市でも、図書館がまちづくりの有機的に組み込まれ、「図書館がムアを変える」流れとなることを願います。